

編集後記

学術論文の査読や編集作業を行う際に、その論文の「新奇性」が重要であることは言うまでもない。ただそれとともにしばしば頭に浮かぶのが「普遍性」と「特殊性」という言葉である。一般に原著論文の場合、様々の観点から対象の母集団を分析し、その中からある普遍的もしくは、より共通の原理または傾向を見出してゆく作業にもとづくことが多い。そしてそこに存在する、より「普遍的」な事象を据えて成果とし、その事象が「普遍的」であればある程、その価値は高いものとなることが一般的である（また対象の母数が多ければ多い程、また比較試験ではその random 化がなされている事がさらにその価値を高めることとなる）。一方、症例報告においては、その症例が珍しく、それ自体が「特殊性」を有していれば有している程、その価値は高いものとなることが通常である。

一般に、特に形而上学的な議論では、「特殊性」より「普遍性」にその重きが置かれ、一方で物にかかわる価値、すなわち商品や人の評価は、「特殊性」もしくは「希少性」が価値であり、一般的でいたる所に所在するものに価値は付与されない。このことは東京大学、松井孝典教授が指摘しておられることである。

グローバリゼーションという「普遍性」と、個々の国や地域における歴史や文化、文明や習慣といった「特殊性」が対峙する局面は社会のいたる所でみられる。このことは医療の分野でも例外でなく、無論その両立が重要であることは言うまでもないが、「標準化治療」と「個別化治療」などが概念としてそれぞれ「普遍性」と「特殊性」の価値観を背景に存在している。

学術論文においては、原著論文に代表される「普遍性」の価値が、「特殊性」よりも重要視され、特にその傾向は欧米で顕著であり、グローバリゼーションの推進役である米国ではその傾向が強いことはむべなるかなと思われるが、一方、「症例報告」という比較的特殊な症例の報告を読み、学んで各々の医師が、その知識を共有してその経験の幅を広げることは、個々人にとって、まさに医師個人という「特殊性」の価値を高めることにつながるのも事実である。原著論文とともに症例報告の価値も、もう少し見直されるべきではなかろうかと考えながら、また査読をさせていただく機会により、多くの症例を学ばせていただく恩恵も感じつつ編集作業にあたっている昨今である。

(桑野博行)